

# 密教における智慧の具象化

野 口 圭 也

(種 智 院 大 学)

## は じ め に

後期インド密教においては、行者によって証得されるべき最高究極の真理が、文献ごとに様々な「名称」によって表現されている。その名称は文献ごとに相違があるが、二元性を完全に超越した「自ら証すべき智慧 (svasaṃvedya-jñāna) [ヘーヴァジュラタントラ I-viii-51など]<sup>1)</sup>」であることは共通している。この智慧はすなわち最高の真理、究極の境地であり、悟りの内容に他ならない。<sup>2)</sup>

このような真理は、本来は具体的な形態を超越したものである。もし仮に真理が丸や三角等の、ある形態によって表現されたとしたら、それは必然的に四角や星形などの他の形態を排除することになるのであるから、二元性を超越していないことになる。しかしながら密教においては、あえて真理＝智慧を具体的な形を持つ事物によって表現し、それを用いて真理に到達することを意図したのであった。

密教においては、智慧はある特定の形を持つものとして具象化されて表現される。それはもとより、真理もしくは智慧そのものではなく、その象徴として表現されたものである。しかし密教の修行者は、形態を持つ象徴に依拠してブッダの智慧を獲得し、自ら真理に到達することを目指してい

た。本稿では、事物と尊像によるインド密教における智慧の具象化の具体例を紹介し、さらに密教において智慧がある特定の形態をもって具象化することが可能である根拠について考察することとしたい。

## I. インド密教の根本理念

インド密教では、その実践法の有効性を保証するために、いくつかの顕著な特徴を持つ基本理念が根底に置かれている。詳しくはかつて拙稿において述べたが [野口 1999, 60-64], その概略は次のようなものである。

1. 現生成就：現在の生存期間中に悟りを得ることができる。

秘密集會に専心する菩薩は、今生において (ihaiva janmani), 一切如来の中で仏の数に入ることができる。[秘密集會タントラ 109・松長 198]

一切の分別を離れた者は、他ならぬ現在生において (janmanihaiwa) 成就する。[智慧成就 I-56cd]

2. 象徴万能主義：象徴を用いた儀礼に悟りを得るための有効性を認める。

①真理は象徴（象徴物・象徴言語・象徴動作）によって表現される。

②「象徴するものと象徴されるものとは同一である」[津田 326]

③「自己が絶対者と相似ならば自己は絶対者と同一である」「自己の構造を象徴操作を通じて絶対者と相似なる状態に再構成し得たとき、自己は絶対者とヨーガ<sup>ヨーガ</sup>合一した状態にある」[津田 216-217]

3. 解脱至上主義：解脱という究極の目的のためには、あらゆる手段が正当化される。

①五蘊などのすべての事物は、みな清浄である。

色形などの対象も他の物も、ヨーガ行者にとっては輝いている。それらすべては清浄を〔本来の〕性質としている。なぜなら、世間のものはブッダからなるからである。〔ヘーヴァジュラタントラ I-ix-4・野口 1993, 99〕

②従って、いかなる実践手段を採っても修行者の清浄性は失われない。

およそ世間の人々が束縛される、そういう〔色形などの世俗の事物〕により束縛を解き放つ。世間の人々は迷乱し、真実を知らない。真実と離れている者は成就を得ないだろう。〔ヘーヴァジュラタントラ I-ix-19・野口 1993, 101〕

4. 性的ヨーガの採用：上記 1 から 3 の根拠により、無上瑜伽階梯のタントラに依拠する後期インド密教においては、男性と女性の性的ヨーガの状態が、そのまま菩提を表すことになる。

まず女性が智慧 (prajñā) であるべし。方便は男性と伝えられている。  
〔ヘーヴァジュラタントラ I-viii-28ab〕

よって、(女性+男性)=(智慧+方便)=(空性+大悲)=菩提、となる。後期密教における男女尊の合体像は、菩提そのものを男女合体像という形態によって表した象徴表現である。

以上に挙げた特徴は後期密教において殊に顕著であるが、インド密教そのものが保有していた根本理念であり、中期までの密教と後期密教の差は、程度の違いに過ぎない。

このような根本理念の下では、特定の形態を持つある事物によって象徴として表現されたものは、象徴されているそのもの——真理もしくは智慧——と、相似ではなく「同一」となる。その際に実践の妨げとなるものは何ら存在せず、密教行者はただ智慧の獲得、真理への到達をひたすら目指して、師匠によって教示される実践に邁進すればよいことになる。

## II. インド密教における智慧の具象化

### 1. 象徴物による智慧の具象化

上記の根本理念に基づき、密教では具体的な事物によって、以下のよう  
に智慧を具象化して表現する。

#### (1) 金剛杵・金剛鈴による智慧の具象化

密教においては早くから、元来はインドラの持ち物である金剛杵に「堅  
固」と「摧破」の徳を充て、ブッダの智を象徴する法具とみなしてきた。  
特に両端に5本の針（鉷）を持つ五鉷杵は、五智を表したものとされる。

両邊各有五股。五佛五智義。[都部陀羅尼目 900a3-4]

また

金剛杵は12指量の大きさをもって、十二支縁起という清浄〔なる本  
質を表している〕。(中略)ここでは輪廻の大海に生じる〔衆生の方  
を〕向くがゆえに五鉷の形をして、牟尼らが五蘊の清浄〔なる本質〕  
として輪廻の身体をして出現し遍満している。またそこで、周辺の  
〔四〕鉷が〔彎曲〕して中央の鉷を向いていることによって、色等  
〔の四蘊〕はすべて識〔蘊〕を本体としている、ということが表され  
ている。(中略)これら〔五鉷〕は大円鏡、平等性、妙観察、成所作、  
清浄法界という様相を持つ五つの智を本体としていることを師の教え  
により知るべし。[灌頂主旨綱要 232]

金剛杵と鈴が合体した金剛鈴もまた、上部の五鉷杵の部分が五智を表し  
ている。

この法界を本体とする智慧が、毘盧遮那等の五如来を本質としてい  
ること、また色等の五蘊の本性であること、地等の五界の〔本〕体である

ことを説くために、上方に五鉢があしらってある。[灌頂主旨綱要 230]

## (2) 灌頂における智慧の5つの象徴物への配当

後期密教における四段階の灌頂の第一段階において、「五種灌頂」あるいは「明灌頂」と総称される水・冠・金剛杵・鈴・名を師匠から弟子に授ける儀礼がある。これらは順次、大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智・清浄法界智の、五如来に配当される五智を弟子に授与することに対応している。ただし、文献によって清浄法界智の配当に相違が見られる [桜井 1996, 107]。

水灌頂は大円鏡智を本体とし、阿閼〔如来〕を本性としている。冠灌頂は平等性智を本体とし、宝生〔如来〕を本性としている。金剛杵灌頂は妙觀察智を本体とし、無量光〔如来〕を本性としている。尊主（鈴）灌頂は成所作智を本体とし、不空成就〔如来〕を本性としている。名灌頂は無明を滅するので明〔智〕に随順せる清浄法界智を本体とし、毘盧遮那〔如来〕を本性としている。[灌頂主旨綱要 236-234]

〔水ないし名の〕これら5つの灌頂による大円鏡などの智の清浄により、明灌頂 (vidyābhiṣeka) と言われる。[ヘーヴァジュラ灌頂作法 25-26]

灌頂においてこれら水や冠などの5種類の事物を弟子に授けることは、単にこれらの物体を授けるのではなく、それらが象徴している五智を弟子に授けることに他ならない。上に述べた通り、インド密教の根本理念では「象徴するものと象徴されるものは同一」なのである。ただし、桜井宗信氏が指摘されるように、灌頂の第一段階に過ぎない五種灌頂終了の時点では、最終目的である仏の智慧を獲得することはできるものではなく、「将来五智が得られる潜在能力を育てる儀礼」とする理解もある [桜井 1996, 109]。しかし五仏・五智と金剛杵の対応は、既に中期密教において見られ

ることを考慮すると、「灌頂において金剛杵という象徴物を用いて五智を授ける」ことは、後期密教成立以前から灌頂儀式における重要な要素とされていたことになる。従って中期密教の灌頂儀式を第一段階の灌頂として採用した後期密教においても、儀式の意味は中期密教の伝統を継承し、この段階ではひとまず象徴によって五智の授与を行い、後期密教特有の実践を含む第二段階以降の灌頂においてそれをより堅固なものにする、と考えることもできるだろう。

## 2. 尊格による智慧の具象化

密教においては金剛杵のような事物ばかりではなく、具体的な姿形を持つ尊格によって智慧を表現することもまた、行われるようになる。

### (1) 中期密教における五仏と五智の対応

金剛界五仏と、従来からの四智に「清浄法界智 (suviśuddhadharma-dhātujñāna)」もしくは「法界体性智」を加えた五智との対応は、不空訳の『金剛頂瑜伽三十七尊出生義 (出生義)』また『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要 (心要)』に見られるが、両者の対応の展開については頼富本宏博士の研究に詳しい [頼富 215-228]。『出生義』ならびに『心要』における五仏と五智の対応は以下の通りである。( ) 内は『心要』による。[出生義 298a15-24] [心要 292a8-b7]

東 阿閼如来 大円鏡智

南 宝生如来 平等性智

西 阿弥陀如来 妙觀察智

北 不空成就如来 成所作智

中央 毘盧遮那如来 法界体性智 (五智円満・真如法界智)

このように、五仏を中心として構成される金剛界曼荼羅の象徴の体系に、

五智が組み込まれる。金剛界曼荼羅においては五智は具象化されて、尊容を持つ五仏によって表現される。この時、五仏とのヨーガを実修することにより、密教行者は五智を獲得することになる。

## (2) 後期密教における五仏と五智と五煩惱等の対応

五仏と五智との対応は後期密教にも継承される。ただし後期密教のマンダラでは、五仏のうち中央の毘盧遮那と東方の阿閼が居所を交代するため、五智との対応も入れ替わる。また五仏が五智のような出世間の徳目ばかりではなく、五蘊・五煩惱等の世間世俗の要素や、「五甘露」と呼ばれる不浄な事物とも対応されることが、後期密教の重要な特徴である〔五（如来）の形相 222-216〕。

| 方位 | 五仏     | 色   | シンボル   | 印契   | 五智    | 五蘊 | 煩惱 | 五甘露 |
|----|--------|-----|--------|------|-------|----|----|-----|
| 中央 | 阿閼如来   | 青黒色 | 金剛杵    | 触地印  | 清浄法界智 | 識蘊 | 瞋恚 | 金剛水 |
| 東  | 毘盧遮那如来 | 白色  | 輪      | 覚勝印  | 大円鏡智  | 色蘊 | 愚癡 | 大便  |
| 南  | 宝生如来   | 黄色  | 宝      | 与願印  | 平等性智  | 受蘊 | 两舌 | 血液  |
| 西  | 無量光如来  | 赤色  | 蓮華     | 禅定印  | 妙觀察智  | 想蘊 | 貪欲 | 精液  |
| 北  | 不空成就如来 | 暗緑色 | 剣(羯磨杵) | 施無畏印 | 成所作智  | 行蘊 | 慳恪 | 肉   |

これら五仏の形相はブッダの身体の特徴を具え、五智と五蘊等を同時に表現し、複雑な象徴の体系を構成しているとは言え、恒常不変の実在では決してない。

〔その〕身体は三十二相・八十種好によって荘嚴され、十力・〔四〕無所畏等の功德聚の一所住处であり、〔無用な〕九孔・肉・骨がなく、ただ顕現に過ぎない鏡〔に写る〕影像のようであり、真実でもなく虚偽でもない。〔五（如来）の形相 222〕

五智を体現したブッダの身体は、三十二相を具えた諸如来の形相という具体的な形をもって表現される。しかしそれは「鏡の影像」のごとくに、ただ顕現したものでしかない。アドヴァヤヴァジュラはそれを「真実でも虚偽でもない」と述べる。これはアドヴァヤヴァジュラ個人の見解であろうが、マンダラや諸尊の形象が真実であるか、虚偽であるかという問題は密教の学匠それぞれの認識論上の立場を反映しており、今後検討すべき重要な課題である<sup>3)</sup>。

### (3) 後期密教における清浄法界智に対応する如来の相違

同じ著者によるものでありながら、『灌頂主旨綱要』の所説と、『五(如来)の形相』とでは、清浄法界智に配当される如来が相違している。先に触れたように、桜井宗信氏の研究によれば、後期密教における五種灌頂と五智・五仏の対応には、文献によって二通りの見解がある。一つは「水灌頂—阿閼—清浄法界智、名灌頂—毘盧遮那—大円鏡智」、もう一つは「水灌頂—阿閼—大円鏡智、名灌頂—毘盧遮那—清浄法界智」とするものである [桜井 1996, 107]。

後期密教では五仏のうちの阿閼と毘盧遮那の位置が交代するのに伴い、中期密教に当たる瑜伽階梯のタントラでは中央の毘盧遮那に配当されていた清浄法界智を、後期密教の無上瑜伽タントラでは同じく中央の阿閼に配当することになるのは理解できる。しかしながら無上瑜伽でも毘盧遮那に清浄法界智を配当する場合があるのは、桜井氏によれば「“これらの儀礼は瑜伽タントラ階梯の解釈に則って行われるべきだ”という見解の存在したことが関係したのではなかろうか」とされている [桜井 1996, 107-108]。

無上瑜伽階梯の密教であっても、第一段階の灌頂儀礼においては瑜伽タントラの伝統をそのまま継承する、という立場があったとすれば、ここで



見た通りアドヴァジャヴァジュラが、灌頂についての論書である『灌頂主旨綱要』では瑜伽タントラの伝統に従って清浄法界智を毘盧遮那に配当する一方で、五仏による象徴の体系を説く『五（如来）の形相』においては後期密教の立場から阿閼に配当していることは、桜井氏の見解を裏付けるものと言える。

#### （４）『ヘーヴァジュラタントラ』のマンダラにおける五智の具象化

##### ①『ヘーヴァジュラ灌頂作法』における五智と諸尊との対応

『ヘーヴァジュラ灌頂作法』では、第一段階の灌頂の構成要素の一つである「不退転の灌頂」として、『ヘーヴァジュラタントラ』に説かれるマンダラのうち、同タントラII-v所説の9尊マンダラの諸尊とその持ち物の意味を説明している。『ヘーヴァジュラタントラ』のマンダラでは、男性の五仏は姿を消し、主尊ヘーヴァジュラ（ヘールカ）以外はすべて女性尊となっている。これらの諸尊はいずれも、裸でおどろおどろしい姿をしており、持ち物もナイフやカパーラ、魚・亀・蛇など、怪しげなものばかりである。9尊マンダラでは、中央のヘールカ尊に清浄法界智、その四方のガーウリー、チャーウリー、ヴェーターリー、ガスマリーの4女尊にその他の四智が配当されている〔ヘーヴァジュラ灌頂作法 29・野口 1993, 105〕。すなわちこのマンダラでは、恐ろしげな尊容のヘールカ尊と4名の女尊によって五智が具象化されているのである。

このマンダラにおいては、五智ばかりではなく、波羅蜜のような出世間の徳目と、五蘊や煩惱のような世間世俗の要素が同一の尊格によって表現されている。ここでは、マンダラが単に五仏＝五智という聖なる存在の集合体であるのではなく、聖と俗とがマンダラという一つの空間において同時に表現されているのである。

弟子は灌頂の儀式においてこのマンダラを見て、マンダラの構造物や、

配置されている諸尊の意味するところを師匠より教示され、「マンダラの真実 (maṇḍalatattva)」ならびに「女尊の真実 (devatitattva)」を知る [ヘーヴァジュラタントラ灌頂作法 29]。『灌頂主旨綱要』においても、第一段階の灌頂において「マンダラの真実 (maṇḍalatattva)」および「尊格の真実 (devatātattva)」を弟子に教示する過程がある [灌頂主旨綱要 229-228]。

②主尊ヘーヴァジュラ・女尊の尊容の意味 cf. [野口 2004, 134-135]

『ヘーヴァジュラタントラ』I-ixに説かれる、15名の女性尊から構成されるマンダラにおけるヘーヴァジュラ尊は八面十六臂の姿をしているが、それは八解脱と十六空を意味している [ヘーヴァジュラタントラ I-vi-15]。

またヘーヴァジュラ尊の装身具が五仏を表していることにより、ヘーヴァジュラ尊は五仏に配当される五智を身に着けていることになる [ヘーヴァジュラタントラ I-vi-11-12]。

15尊マンダラの女尊たちの持ち物の「本性」についても、次のように説明されている [ヘーヴァジュラタントラ I-viii-20-21]。

カトヴァーンガ杖 (左に抱える)=空性 (I-vi-12では智慧 prajñā)

どくろの首環=方便

### III. 智慧の具象化の根拠としての「清浄 viśuddhi」

マンダラの諸尊への意味の配当を説く『ヘーヴァジュラタントラ』I-ixは、「清浄の章 viśuddhipaṭala」である。ここでは「清浄 viśuddhi」ということばを媒介として、出世間の徳目と世間世俗の存在の双方が、マンダラの諸尊に配当される。この章では「清浄」の語は次のように用いら

れている。

すべての事物にとって、**清浄**が真のあり方だと伝えられている。<sup>4)</sup> [1ab]

六根、五蘊、六境、五大種は、本性としては**清浄**であっても、無知と煩惱によって覆われている。<sup>5)</sup> [2]

識〔蘊〕の姿でナーイラートミヤヨーギーニ〔女尊〕がいる。<sup>6)</sup> [9ab]

常に彼女らの**清浄**〔なる本質〕により〔諸尊の〕真実〔を知る〕ヨーガ行者は成就する。<sup>7)</sup> [9cd≐14cd]

〔主尊ヘーヴァジュラの十六本の〕腕の**清浄**〔なる本質〕は〔十六の〕空性であり、〔四〕魔〔の破壊〕を**清浄**〔なる本質〕とするから、〔主尊ヘーヴァジュラの四本の〕足がある。八解脱〔の**清浄なる本質**〕により〔主尊ヘーヴァジュラの八つの〕顔があり、〔身・口・意の〕三持金剛には〔主尊ヘーヴァジュラの三〕眼の**清浄**〔なる本質〕がある。<sup>8)</sup> [15]

ヴァジュラー〔女尊〕は愚癡であると、同様に語られている。〔これが〕瞋恚などの**浄化**である。かくして、生起次第の方面から五蘊〔などの諸々のもの〕は**浄化**される。<sup>9)</sup> [18]

すべてのものの**清浄**〔なる本質〕により、〔このすべての〕世界は、**清浄**を本性とする世界であると、私は考える。<sup>10)</sup> [20]

また『ヘーヴァジュラ灌頂作法』では「本性 svabhāva」の語を用いて諸尊への意味の配当を説くが、「清浄 viśuddhi/suddhi」の語を用いる場合もある。

大力波羅蜜の**清浄**〔なる本質〕により、チャンダーリー〔女尊〕が<sup>11)</sup>いる。

あるいは

身語意の三業の清浄〔なる本質〕により、〔プッカシー女尊の持ち物である〕斧がある<sup>12)</sup>。

さらに『灌頂主旨綱要』にも、先に挙げたように次の表現がある。

金剛杵は12指量の大きさをもって、十二支縁起という清浄〔なる本質〕を表している<sup>13)</sup>。

また次のような表現も見られる。

牟尼らが五蘊の清浄〔なる本質〕として、輪廻の身体をして出現している<sup>14)</sup>。

マンダラの真実〔の意味〕、すなわちマンダラの清浄〔なる本質〕を表わすもの、〔マンダラに配置される〕尊格の真実〔の意味〕、すなわち尊格の清浄〔なる本質〕を表わすもの<sup>15)</sup>

『五（如来）の形相』にも次のような表現が見られる。

これらが阿閼如来の清浄〔なる本質〕である<sup>16)</sup>。

あるいは

大便として清浄であり、（中略）冬の季節として清浄であり<sup>17)</sup>

これらの例から明らかなように、「清浄」は諸尊を他の事物や項目と対応させる際の重要な概念となっている。

筆者は後期密教の文献に現れる‘viśuddhi’の語を「清浄〔なる本質〕」と訳す場合が多いが、これは単に、「諸存在は本性清浄である」というだけの意味ではない。‘viśuddhi’の語は世間世俗の存在に対しても出世間の要素にも、諸尊にも用いられる。後期密教文献では、‘viśuddhi’の語によって五智や波羅蜜など、あるいは五蘊や五煩惱のいずれもが「清浄」すなわち「空」である<sup>18)</sup>ことを示しており、それはまた同時に、五智などを尊格によって表現することを可能にする根拠となる。通常は同等たり得ない、

五蘊や煩惱などの世間世俗の存在と、五智や波羅蜜などの出世間の要素とが、‘visuddhi’を媒介として、マンダラの中で諸尊の身体上に同置されることになる。これは性的ヨーガを含む後期密教の特異な実践を行ったとしても、行者の清浄性は損なわれないことを保証するものでもある。

ある事柄を何らかの言葉や図形で表現する場合、事柄と言葉や図形との間に、固定された恒常不変の結合関係が存在していたら、マンダラにおいてその事柄を表現するには、必ずその言葉や図形を用いる他は無い。しかし固定的・恒常的な結合を断ち切るならば、ある事柄を表現する言葉や図形は、それぞれの経典作者やマンダラ成就法の作者によって恣意的に決定される。それぞれの経典やマンダラにおけるルールに基づいて、言葉なり図形に事柄を対応させれば良いことになる。ここで言われている「清浄」は、その固定的・恒常的な結合もしくは対応関係を断ち切る役割をも果たしているのである。

かくしてこのマンダラでは、聖と俗とが尊格の姿として同時に表現される。そして生身の女性を配置した現実のマンダラにおいて、主尊ヘーヴァジュラの姿を取る行者の身心は、五智などの集合体と同一となる。この時マンダラは、冒頭に述べた密教の根本理念に基づき、そこに入って女尊との性的ヨーガを実修する修行者を直ちに聖なる存在へと転換せしめる装置となるのである。

## 結 語

ブッダの智慧は、本来は言語や形象の領域を超越しているものであった。しかし密教は、積極的に智慧に名称を与え、形ある事物によって智慧を表現することを試みたのである。それに根拠を与えたのが「清浄」であった。

「清浄」によって、智慧は具体的な形を持って表現することが可能なものとなった。形態を持ち言語化された智慧は、象徴物を用いた儀式によって、あるいは師匠が弟子に語る言葉によって、授受可能なものとなったのである。このようにして密教行者たちは、現在の生存期間中にブッダの智慧を獲得し、ブッダと等しい存在になることを実現しようとしたのであった。

しかし智慧を具象化することは、智慧を獲得するための真に有効な手段となり得たのであろうか。具象化して象徴を用いて授受された智慧が、真にブッダの智慧そのものであるためには、それにブッダの智慧としての内実を与える、行者の意識的な努力が不可欠である。短期間に多くの聖典が次々と編纂され、種々のマンダラが造り出されていった後期インド密教の展開は、より有効にして確実、かつ実感を伴う智慧の獲得法を追求していた密教行者たちの苦闘をそのまま物語っているのではないだろうか。

## テキスト

灌頂主旨綱要：Advayavajra 著 *Sekatātparyasaṃgraha*. ed. 密教聖典研究会（野口圭也担当）「アドヴァヤヴァジュラ著作集——梵文テキスト・和訳（2）——」『大正大学総合佛教研究所年報』第11号，1989。

五（如来）の形相：Advayavajra 著 *Pañcākāra*. ed. 密教聖典研究会（大塚伸夫担当）「アドヴァヤヴァジュラ著作集——梵文テキスト・和訳（2）——」同上

出生義：不空訳『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』大正大蔵経 No. 872, vol. 18.

心要：不空訳『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』大正大蔵経 No. 871, vol. 18.

智慧成就：Indrabhūti 著 *Jñānasiddhi*. ed. Samdhong Rinpoche and V. Dwivedi, *Guhyādi-Aṣṭasiddhi-Saṃgraha*, Varanasi, 1987.

都部陀羅尼目：不空訳『都部陀羅尼目』大正大蔵経 No. 903, vol. 18.

秘密集会タントラ：*Guhyasamājatantra*. ed. 松長有慶『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版，1978。

ヘーヴァジュラ灌頂作法：*Hevajrasekaprakriyā*. ed. L. Finot, Manuscripts sanskrits de sādhana's retrouvés en Chine, *Journal Asiatique*, Juillet-

Septembre, 1934.

ヘーヴァジュラタントラ: *Hevajratantra*. ed. D. L. Snellgrove, *The Hevajra Tantra A Critical Study*, part II, London, 1959, repr. 1976.

## 参考文献

梶山: 梶山雄一『般若経』中公新書 422, 中央公論社, 1976。

桜井 1996: 桜井宗信『インド密教儀礼研究 後期インド密教の灌頂次第』法蔵館, 1996。

桜井 2004: 桜井宗信「Vāgīśvarakīrti と Ratnakīrti ——六賢門時代の密教と唯識思想の関わり——」『佛教文化学会十周年・北條賢三博士古希記念論文集 インド学諸思想とその周延』, 山喜房佛書林, 2004。

津田: 津田真一『反密教学』リプロボート, 1987。

野口 1993: 野口圭也「マンダラの成立根拠」, 立川武蔵編『曼荼羅と輪廻その思想と美術』佼成出版社, 1993。

野口 1999: 野口圭也「後期密教の思想と実践 父タントラ・母タントラ」, 立川武蔵・頼富本宏編『シリーズ密教1 インド密教』春秋社, 1999。

野口 2004: 野口圭也「後期密教における聖なるものの形と場」, 『聖なるものの形と場』法蔵館, 2004。

野口 2005: 野口圭也「21世紀のマンダラ観想法」『密教学研究』第37号, 2005。

松長: 松長有慶『秘密集会タントラ和訳』法蔵館, 2000。

頼富: 頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館, 1990。

## 註

- 1) 例えば『ヘーヴァジュラタントラ』などでは「俱生 (sahaja)」, インドラプーティの『智慧成就』では「金剛のごとき智慧 (vajrajñāna)」, アナングヴァジュラの『般若方便決定成就』では「般若と方便の合一 (prajñopāya)」, 『五次第』では「双入 (yuganaddha)」と呼ばれる。

- 2) 一例を挙げると, 次の通りである。

これこそは大いなる智慧であり, 全身に定住している。〔それは〕不二かつ二の姿をしており, 存在と非存在〔の双方を本〕質とし, 主である。動かつ不動であり, 遍満して, 幻の姿をしており, かつ輝く。〔ヘーヴァジュラタントラ II-iii-24-25ab〕

あるいは

虚空のごとくに際限なく, 遍満し, 特質を離れている。これがかの最

高の真実、無上の金剛のごとき智慧である。[智慧成就 I-73]

- 3) [桜井 2004] を引いて, [野口 2005] においても取り上げている。
- 4) sarveṣāṃ khalu vastūnāṃ **viśuddhis** tathatā smṛtā / [ヘーヴァジュラ  
タントラ I-ix-1ab]
- 5) ṣaḍindriyaṃ pañcaskandhaṃ ṣaḍāyatanaṃ pañcabhūtaṃ / [同2ab]  
svabhāvena **viśuddham** apy ajñānakleśair āvṛtaṃ / [同2cd]
- 6) vijñānaskandharūpeṇa sthitā nairātmyayoginī / [同9ab]
- 7) sadā tāsāṃ **viśuddhyā** vai sidhyanti tattvayoginaḥ / [同9cd≒14cd]
- 8) bhujānāṃ śūnyatā **śuddhiś** caraṇā mārāśuddhitaḥ / [同15ab]  
mukhāny aṣṭavimokṣeṇa netraśuddhis trivajriṇām / [同15cd]
- 9) mogho vajrā tathā khyātā dveṣādināṃ tu **śodhanam** / [同18ab]  
etena **śodhyate** skandham utpattikramapakṣataḥ / [同18cd]
- 10) sarva**viśuddhyā** **śuddhasahāva** jago jaga manye / [同20]
- 11) mahābalapāramitāś**uddhyā** caṇḍālī. [ヘーヴァジュラ灌頂作法 29]
- 12) kāyavākciṭṭa**viśuddhyā** paraśuḥ. [ヘーヴァジュラ灌頂作法 29]
- 13) dvādaśāṅguliparimāṇeṇa dvādaśāṅgapratītyasamutpādaviśuddhyā  
vajram / [灌頂主旨綱要 233]
- 14) munayaḥ pañcaskandhaviśuddhyā niṣkrāntā bhavaśarīreṇa / [灌頂主  
旨綱要 233]
- 15) maṇḍalatattvaṃ maṇḍalaviśuddhilakṣaṇaṃ devatātattvaṃ  
devatāviśuddhilakṣaṇaṃ [灌頂主旨綱要 229]
- 16) akṣobhya**viśuddhā** amī [五(如来)の形相 221]
- 17) viḍ**viśuddho** ..... hemantartu**viśuddho** [五(如来)の形相 219]
- 18) 梶山雄一博士は『八千頌般若経』における「清浄」の語について、「清浄  
あるいは本性清浄ということばは空の同義語といってもよい」と述べてお  
られる。[梶山 140]